

Moduli undecim festorum(Recent Researches in the Music in the Renaissance),LVI

Ed by J.Heywood Alexander, A-R Edition

【フランス・ルネサンス期の宗教的多声音楽】

フランソワ 1 世の治世の間ピエール・アテニャンは楽譜印刷業をほぼ独占していました。彼はフランスで初めて楽譜出版をした人です。彼の死後は Nicolas du Chemin, Robert Granjon, Le Roy, Ballard, Michel Fezandat, Guillaume Moraye などが活躍し始めます。ここにご紹介する楽譜は彼らが出版活動をした 16 世紀フランス、パリ楽派の作曲家たちが書いた教会暦に基づく多声典礼楽曲です。

パリ楽派というとシャンソンのイメージが強いかもかもしれませんが、世俗曲をたくさん残したパリ楽派の主要な作曲家たちも実は聖職者であるケースが多く、当然典礼のための曲も当時の様式で書いています。ここに所収された作曲家と作品は以下の通りです。

1. Maillard: Victimae paschali laudes(復活祭セクエンツィア)
2. 同上 : Ascendo ad patrem(昇天祭)
3. Villefond: Si quis diligit me(聖霊降臨)
4. P. Certon: Homo quidam(聖体祝日)
5. C. Goudimel: Gaburiel angelus(洗礼者ヨハネ)
6. N.Gombert: Durge Petre(聖ペトロ)
7. C.Goudimel: Ista est speciose(おとめマリア)
8. P.Certon: Ecce ego Johannes(諸聖人祝日)
9. C.Goudimel: Hodie nobis(降誕)
10. 同上 : Videntes stellam(公現祭)
11. A.Gardane: Suscipiens Jesum(マリアの浄め)

ここにグディメルの作品(5, 7, 9)が入っていることにも注目してください。彼はプロテスタントに改宗し、ユグノーとしてフランスの改革派教会で活躍します。ジュネーヴ詩編への作曲が彼の大きな業績です。

この Recent Researches のシリーズはすべての曲に英語の対訳がついており、また聖書や聖務日課書からのテキストは引用箇所がすべて明記されています。グディメルは出版にあたって、「聖なる典礼は救いの果実を産み出す。それは歌によっても崇められるべきである。これほど耳に心地よい甘美なものはない。耳は無限の喜びを受け取る」と書いています。

(杉本ゆり 記)